

きいてくらしやい 昔話

—長岡民話の会—会報第 19 号 平成 25 年 7 月発行—

皆様、いよいよ夏本番です！お元気ですか？ 猛暑に体力を奪われがちですが、水分とエネルギーの補給をしながら元気に乗り切りましょうね！

さて、お待ちかねの会報をお届けします。民話の会恒例の百物語も近づいて来ました。夜空を彩る長岡花火のように今年も見事な民話の尺玉 100 連発を打ちあげましょう！

それでは皆様、“打ち上げ開始でございます♪” (千)



☆活動報告と活動予定

日程	内容
4月27日(土)	第10回総会(阪之上コミュニティセンター) 出席者21名 委任状12名 欠席6名
6月8日(土)・9日(日)	新潟県民話語り連絡協議会長岡大会 於：アオーレ長岡 市民交流ホールA 参加11団体 来場者数245名(一般100名を含む) 和泉屋宿泊3会場にて夜語り(101名宿泊) 翌日山古志観光後(昼食95名)解散
9月25日(水)・26日(木)	第8回長岡民話百物語(2日間で100話) 会場：アオーレ長岡 市民交流ホールA 時間：9/25(水) 10:00~18:00 9/26(木) 10:00~16:00 9/26(木) 終了後後片付け後反省会
10月下旬予定	伝説地“安塚”研修旅行
11月初旬予定	市民活動まつり参加 内容：パネル展示(予定)

お知らせ



❶ 新企画スタート！！

今号から新企画として、“長岡の伝説”を掲載致しました。

第1部は語り、第2部は、伝説の出典や伝え聞いたものであればその経緯や語った時の自分の思いなどを紹介していきたいと思っています。

短編、長編は問いません。

皆様からのご投稿を心よりお待ちしております。





短い話

高橋 実

語りは、長い話ばかりではない。ピリリとわさびが効いた話も面白い。

語りは時間が決められているので、それにいつでも対応できるようにしておく必要がある。決められた時間を超えると主催者に迷惑をかけることになる。時間があまったので、短い話をして調整することも出てくる。

知人の十日町市松代福島に住む高橋八十八氏は、新聞の投書欄に投書する人だから名前を知っている人もいるだろう。動植物の話から方言の話まで様々な話を詰め込んだ「高橋八十八博物誌 わたしの合切袋」という本を出しているが、その後は「わが玉石集」とか「奥越後雑記帳」とか題名を変えているが、私の手元に300ページ前後の本が10冊ほど並んでいる。氏のフィールド広さを表している。その中にも昔話が豊富にはいつている。

火事

殿様のお屋敷が火事になった。生まれて初めての火事騒動ですっかりあわてたお殿様。下屋敷に避難されてご無事。これにはよくよく懲りて家来一同を集めて「以後、火事はきつくご法度じゃ」

眼病

伊勢屋の旦那が眼の病気になったという。お医者の見立ては「がんびょう」無学の使用人達は「がんびょう」の意味が解らない。そこへ奥から旦那が眼帯をして出てござった。使用人達一同「旦那様、がんびょうだって話でございますが、その眼はいったいどういたしやした？」

禁酒

ある男が願をかけて3年間禁酒することにした。そこへ悪友が酒を持ってきて「飲もう」と誘った。「いや、おれは飲まんぞ」と断った。その次の晩、みんなが飲んでいるところに酒飲みに来たという。悪友たちが呆れて「もう願掛けを破るのか」と聞いたら、「破ったわけではない。思案して思いついた。3年の禁酒を6年に延ばして夜ばかり飲むことにしたのだ」という。「それはいい思い付きだが、どうせのこと、もっと延ばして12年にして夜昼飲みやがれ」といった。

こうした話がたくさん載せられている。これらは、笑わせることを目的にした小話と言われるものである。落語のマクラとして使われる。オチが聞いた話である。聞いている人を咄の世界に引きずり込み、あっと笑わせる技法、昔話の語りもここまできれば、名人芸と言われるのではないだろうか。高橋八十八氏はこの話を誰から聞いたのだろうか。

本からとられた話、再創造された話、いろいろな話が巷間にあふれている。

江戸時代の安愚楽庵策伝「醒睡笑」という本はこうした小咄の宝庫と呼ばれている。じっくりこの本を読んでみたいものだ。





長岡の伝説 (第1回)

新連載!!

あまやち（尼谷地）の池

柳沢 かずえ

種芋原というところに、尼谷地の池があつての、この池には、恐ろしい大蛇が住んでいるんだと。

ある年の、田植えの忙しい時、庄屋の娘が、田んぼで働く家のもんに、おやつをいっぺ持って、あまやちの池のほとりを通りかかったと。

ほしたら、頭にさしていた、きれいな櫛が落ちてしまったと。

娘は、あつてて「落ちてしもうた」と言うが早いか、すぐに拾って髪にさしたと。

ほうしたら

櫛が、あつという間に、大蛇に変わって、娘と一緒に、ズルズルズルーと、池ん中へ沈み込んで、いったと。

村じゃ、池のほとりに、おやつがあつたろも、娘の姿が見えないってんで、あちこち、くまなく探したろも、見つからねーんだんが、池の底をさらうことにしたと。

村中総出で、三日三晩、池の淵をかり割って、池を干したと。

大蛇は、仕方ねーんだんが、夜中に娘を背中に乗せて出てきて、そのまま天に昇っていったと。

ほうしたら、

干した池はだんだん水が張ってきたと。

あまやちの池の大蛇は、あちこちの池で、牛や龍なんかに姿を変えて、山古志の水を守っているそうだ。

年寄りが言うには、池には一人で行くもんじゃねえ。ということだ。

息がポーンとさけた。

“あまやち（尼谷地）の池”への想い

尼谷地（あまやち）は地名。

そこにある池ということで村民から尼谷地の池（あまやちのいけ）と呼ばれている。山古志村史によると、大蛇が娘をさらっていき、村人にわかってしまい、仕方なく逃げてしまう。

そして、あちこちの池に、牛や龍に化けて、移り住むという。

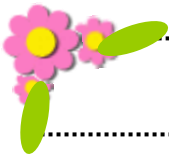
農耕に生きる村人たちの大切な水は、あまやちの大蛇のおかげ。

娘のことはふれていない。

池の多い山古志村民の、水に対する感謝があふれているのだろう。

尼谷地の池のお話をしながら思ったことです。





新潟県大会に参加して

松井 定子

先日開催された第七回新潟県民話語りグループ連絡協議会長岡大会に金沢から参加した。五年前、「長岡民話の会」にご縁があって仲間に入れていただき、第四回の大会が初めての参加だった。その時の研究発表「新潟市周辺の民話の特徴」は興味深く、いまも心に残っている。今回は、大会の前に、警女唄公演や「聞いてくらっしゃい昔話」伝承語りがあった。警女唄は、これまでレコードでしか聴いたことがなかったので、目の前で聴く警女唄に身を乗り出すように聴き入った。また、伝承の語り部として当日、東京から中野ミツさん（三条下田村出身）、新潟県在住の小林脩作さんや鈴木百合子さん、笠原基威さんも来てくださり貴重な語りを聞かせていただいた。

午後は、記念講演や新潟県民話語りグループの方の語りを聞いた。記念講演は「今、語ること」のテーマで野村敬子先生（民話研究家）から語りの原点なるものを聞くことができた。

西洋では、声が第一の文化ということや“語り”は不動の特別な時間であるという。また、新潟県は、伝承のふる里であること、そして、語りの元祖といわれている波多野ヨスミさん（明治四十三年、現・新発田市生まれ）は昔話を六百十九話も語られたということも教えてもらった。

十五年ほど前、「波多野ヨスミ女昔話集」（佐久間惇一編）を新潟の古書店から買い求めていたので、再び読んでみると、波多野ヨスミさんはご両親から多くの昔話を聞いて育ったことも分かった。

また、野村敬子先生は、沖縄から青森に伝わる産屋（うぶや）の話や夜伽（よとぎ）の話もされた。人間が生まれるところには民話があったことや人が病いのときにも人の命に向かって語りかけてきたことなど、人間の命を守るのは声であることをくり返して話をされていた。標準語の語りもいいが、方言での語りは聴く人の心を和ませる力があるように思う。

私は新潟から金沢に嫁いで四十年になるが、これまで古里のことを忘れたことはなかった。先日、念願の「新潟の方言で語る民話の会」を金沢の地で立ち上げた。幼少のころ、亡き祖父が毎晩、方言で民話を語ってくれたことを思い出し、自分の子どもに幾たびも語って聞かせてきた。

その後、地域の小中学校で、読み聞かせの図書ボランティアのお手伝いをするようになり、新潟の方言で民話を語るようになった。しかし、郷里を離れて長い年月が経っていたので自分の語る方言が、これでよいのかと疑問を抱いてもいた。そんな折、「長岡民話の会」に縁があり、すぐに入会した。

五年前、初めて長岡に行き、会の皆さんと会い、「金沢からよう来てくださった」と温かく迎えていただいた。会の方達は方言で民話を語られ、懐かしかった。私の番になり「三枚のお札」を語った。金沢で語るより何倍も緊張したが、その折に「その語りでいいですね」と励ましの言葉をもらって、今も年一回ほど会に参加して皆さんと楽しく語っている。

立ち上げたばかりの金沢の民話の会は、まだ産声をあげたばかりなので産神様から見離されぬように、声をかけ続け大切に育てたい。

大会二日目は参加できず残念だったが多くの事を学ぶことができたことを感謝している。

